

雪印メグミルク株式会社

酪農総合研究所

「酪農生産への貢献」へ向けて



今回は酪農総合研究所の宇高部長に研究所の紹介をお願いしました。

はじめに

酪農総合研究所（以下、酪総研）の歴史は、昭和五十一年三月に雪印乳業(株)創業五〇周年の記念事業として(株)酪農総合研究所が設立されたことから始まります。民間唯一の酪農専門研究機関として「わが国の酪農の発展と酪農民の生活向上に寄与する」調査研究、普及活動を実施してきました。

その後、平成一七年四月に雪印乳業(株)の機能、組織の見直しにより社内研究所となり、平成二一年一〇月には、日本ミルクコミュニティ(株)と雪印乳業(株)の経営統合によって設立された雪印メグミルク(株)の社内研究所として今日に至っています。

時々の情勢によつて組織形態は変遷しましたが、創設以来の基本的な理念を保持し「健全・中립性」の実践に資する調査研究活動の主体性の振興に貢献することを目的として事業を

継承しています。

そして、現在は雪印メグミルクグループの企業理念である三つの使命「消費者重視経営の実践」、「酪農生産への貢献」、「乳（ミルク）にこだわる」の一つである「酪農生産への貢献」へ向けて、自給飼料増産や酪農経営向上に向けた実践的活動を推進しています。

一．基本方針と基本姿勢について

酪農産業に関する幅広い分野の科学的・実践的調査研究とその成果の普及を通して、わが国酪農の発展と食糧の安定的需給に寄与することを基本方針とし、公共性・独立性の高い調査研究活動の実施を基本姿勢としています。

一．取り組み内容について

【調査研究課題】

- ・酪農生産に間接的に関係するもの
- (一) わが国の酪農政策に関する調査研究
- (二) わが国の生乳及び牛乳・乳製品の需給と消費に関する調査研究

・酪農生産に直接関係するもの

(三) 酪農経営の安定的向上に関する調査研究

(四) 国産飼料の生産強化と有効利用に関する調査研究

(五) 乳牛飼養管理の向上に関する調査研究

【酪農サポート】

(一) 研究成果の普及・推進

(二) 経営サポート（経営改善・自給飼料生産・乳牛飼養管理等）

(三) 酪農諮問委員会事務局

(四) 日本酪農青年研究連盟事務局

【広報活動】

(一) 出版・HP運営・講演・シンポジウム等の開催

(二) 酪農と乳の歴史館の活用

三．活動内容について

現在、酪総研では酪農現場立脚型の調査研究を中心とし、自給飼料の生産・利活用「実証圃場」および持続的酪農経営「実証農家」事業を展開しています。

近年、輸入飼料や資材価格が高騰し、酪農

経営を圧迫したことや、酪農および肉用牛生産の近代化を図る基本方針（平成二二年制定）において、粗飼料自給率一〇〇%が謳われたことから、改めて自給飼料生産の重要性

が認識された背景があり、自給飼料生産に強みを持つグループ会社の雪印種苗(株)と連携し

各関係機関のご協力を得ながら、自給飼料の

生産強化による酪農経営の安定化を目的に、

この二つの調査研究を進めています。

加えて、「酪総研シンポジウム」を毎年開催し、喫緊の課題やタイムリーな話題について情報の発信および討議を行う場の提供や、

生乳および牛乳乳製品の需要と供給、酪農制度・政策に関する調査研究、日本酪農青年研究連盟の事務局支援などを実施しています。

四．「実証圃場」の取り組み

「実証圃場」は酪農生産者、団体等の自給飼料生産圃場を選定し、播種作業、植生状況、収量等を調査し、肥培管理および調製利用法等を支援することで課題を抽出し、地域性等

の農家環境を重視した中で、植生改善や給与

飼料の原価低減、飼養管理の改善や生乳生産費低減、国際競争力のある酪農経営の確立や

国土の環境保全、研究成果の地域への波及を目的に調査研究を展開しています。

日本国内の酪農経営における飼料自給率は、平成二三年度にTDNベースで北海道は四八

・五%、都府県は一三・〇%、全国で三一・六%となっており、ここ数十年は低下傾向、

或いは横ばいで推移しています。

国の政策におきましても飼料自給率向上に向けて動き始めている中、この「実証圃場」

の成果を地域へ広く波及させていくことの重要性が一層増している状況です。この取り組みは平成二〇年度より開始され今年で六年目

となり、平成二五年度は北海道で四カ所、静岡県で二カ所の圃場で調査研究を進めています。

す。

(一) 主な取り組み内容

・「作溝型更新機械」を活用した草地（簡易）更新

・イタリアンライグラスを活用した草地強害

植物（雑草）の抑制

- ・ 冬枯れ抵抗性のあるアルファルファ「ケレス」の普及促進

- ・ 耐病性F1トウモロコシ「ビビット」の普及
- ・ 冬作ライムギの導入による自給飼料作物の生産増強

- ・ ペレニアルライグラスの導入

実証圃場では、地域の状況に即したテーマで調査研究を実施しており、取り組み事例についてはHPに掲載し随時アップしています。

HPアドレス：
<http://rakusoukenet/index.htm>

五．経営「実証農家」の取り組み

経営「実証農家」は自給飼料の生産強化とその利活用を原点として、自給飼料生産に影響する土壌管理・植生管理、哺育育成期・搾乳期・乾乳期の飼養管理の改善および経営分析・診断等に取組んでいます。この取り組みは土地利用型酪農および循環型酪農による持続的酪農経営の安定を目指しており、改善経過とその成果を発信し広く地域に普及させ、

酪農生産現場への貢献を果たしていくことを目的としています。

経営「実証農家」への取り組みは平成二二年度より開始され、三年間の取り組み期間、二年間のフォロー期間と合わせて五年間の期間となっています。現在はフォロー期間中の大樹町、中標津町の実証農家二戸と平成二四年度から新規に取り組みを開始した興部町の実証農家一戸にて取り組みを実施しています。

（一）推進体制

推進体制につきましては、酪農学園大学、(株)オーレンス総合経営、現地関係機関、雪印種苗(株)、雪印メグミルク(株)で推進組織を設置し、各関係機関・団体にご協力いただきながら酪総研が総合推進役として取り組みを展開しています。

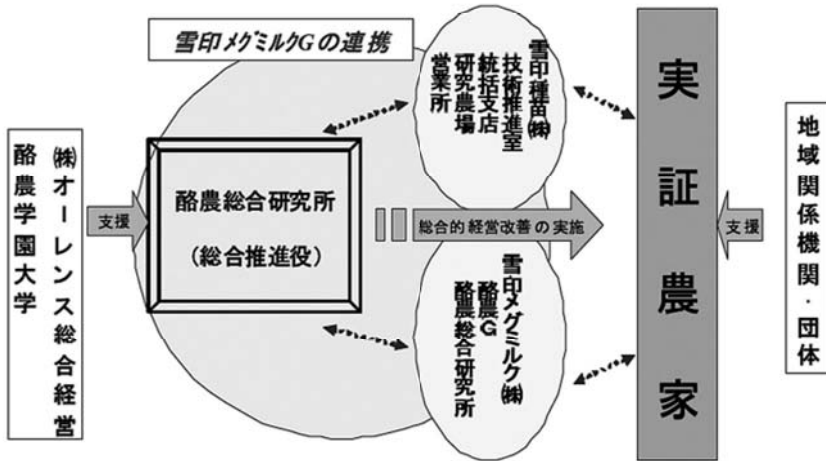
推進体制は図の通りとなります。

シードマチックでの播種



5年目のアルファルファ「ケレス」草地 ペレニアルライグラスの草地





経営実証農家の推進体制



定期巡回時における植生調査



現地検討会

(一) 主な取り組み内容
 ① 定期巡回

経営「実証農家」では定期巡回(月一回)を実施し、草地部門、飼養管理部門、経営分析部門の三部門でデータ収集・分析や調査・研究を実施しています。草地部門では草地診断や植生調査、収量調査、飼料の栄養分析等を、飼養管理部門ではボディコンディションスコアや跛行スコアの調査、牛体測定や飼養環境の調査等を実施しています。また、経営部門では各種経営データの収集と分析を実施

し、部門一体となって実証農家のサポートを展開しています。

② 現地検討会

定期巡回や月次の定性・定量データを基に現地検討会(半期に一回)を開催し、草地管理、飼養管理、経営管理の取り組み経過および結果を検証し、実証農家と議論しながら課題の抽出や改善方針の確認等、今後の方向性を決定しています。

③ 定期検討会

現地検討会終了後には事務局スタッフによる定期検討会(半期に一回)が開催され、改善成果の検証や今後の方向性の確認を実施しています。

④ 取り組み成果について

実証農家においては草地更新、植生および牛舎施設等の改善が進められ、良質サイレージの生産、乾物摂取量の改善、生産乳量の増加等、目に見える形での成果が上がってまいりました。これらの成果は、平成二四年度畜産関係新技術発表会（平成二五年二月二日開催）や酪農ジャーナル（平成二五年七月号）への掲載という形で報告させていただきました。

また、先に開催されたIDF主催の『ワールドデイリーサミット2013』においては、大樹町の実証農家の取り組みを基に「植生改善が酪農経営に及ぼす直接的経済効果」と題してポスター発表を行いました。

中標津町の実証農家につきましては、平成二五年十一月十三日に開催された日本酪農青年研究連盟主催の第六五回日本酪農研究会（第五三回農林水産祭参加・平成二六年度酪農経営コンクール）において改善賞・太田賞を受賞されました。

興部町の実証農家については精力的に植生改善を進めた結果、一頭当り年間平均乳量が

取り組み一年目で一千kg増加し、一万kgを突破するという非常に大きな成果が得られました。また、この取り組みが地域における草地植生改善計画会議設立の原動力となり、まさに実証農家の成果を地域に普及させ酪農生産現場への貢献を果たすことが現実のものとなってきました。

この実証圃場や経営「実証農家」への取り組みが酪農生産者を始め、各関連機関にとつて自給飼料の生産拡大の一助となれば幸いです。

六．酪総研シンポジウム

近年では、世界的に頻発する天候異変や新興国の輸入増加およびバイオエネルギー増産等により輸入飼料の価格は高騰した状態が続いており、国内では飼料自給率の向上が大きな課題として取り上げられています。平成二五年度のシンポジウムでは、「国産飼料を最大限に活かした酪農の再構築」地域の取り組み事例と課題」と題しまして、昨年に引き続き、草地の植生改善を始めた自給飼

料の生産拡大および品質向上について実際に取り組まれている方々からご講演をいただき、会場の参加者と共に今後の飼料自給率向上へ向けて実践的な討論を実施したいと考えています。

終わりに

酪農総合研究所は、雪印メグミルクグループの「酪農生産への貢献」具現化の窓口として、酪農乳業を取り巻く環境が激しく変化する最中、酪農経営の課題の解決に向けスピード感を持って、現場立脚型の調査研究と酪農サポーターの遂行に努めていきたいと考えています。

今後も、酪農乳業の関係者の皆様方と共に課題解決に向けて努力していく所存ですのでご助言、ご指導の程、宜しくお願い申し上げます。



酪 総 研 シ ン ポ ジ ウ ム

と き：平成26年1月31日（金） 13：00～17：00

と ころ：第二水産ビル 8階大会議室 札幌市中央区北3条西7丁目

国産飼料を最大限に活かした酪農の再構築－Ⅱ

——地域の取り組み事例と課題——

1. 開 会	13：00
2. 講 演	13：15
1) 「酪農総合研究所の自給飼料生産拡大の取り組みについて」 雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所長 田 中 二三男	
2) 「牛乳の価値－インスピレーションのその後－」(仮題) 千葉県香取市 酪農家 長 嶋 透	
3) 「『土』『草』『堆肥』作り」 北海道大樹町 酪農家 太 田 福 司	
4) 「JAにおける植生改善の取り組みについて」 JA 道東あさひ 営農センター長 小 島 友 喜	
3. 意見交換	16：20
座長 雪印種苗株式会社 研究開発本部長 高 山 光 男	
4. 閉 会	17：00

※参加無料、定員200名

※参加を希望される方はHP掲載「参加申込書」にて、FAXでお申込みください。

HP：<http://rakusouken.net/index.htm> FAX 011-704-2417

※定員になり次第、参加申込みを締め切らせていただきます。

以上